第5回

石井至の世界放浪記

百戦錬磨の司令官達

今回は、木村三浩さんとのネパール珍道中・後編である。

米倉ジムでボクシングをしていたスレンダーさんの話は前回書いたが、そのスレンダーさんがマオイスト（ネパール共産党毛沢東派）の仲間として紹介してくれたのがプンさんだ。小柄で、いかにも優しそうな顔立ちのプンさんは、マオイストの青年局長をしている。まだ四十歳の若者だ。次世代のマオのリーダーである。

聞いて驚いたが、実はこのプンさん、マオイストが最終的に体制を倒し革命を成功させる、十一年間に及んだネパール政府との人民戦争の、最初の襲撃を指揮した司令官の一人だというのだ。

三十八人の十代の若者を引き連れ、ルコム郡のラジユラ警察署を襲撃したという。当時はまともな武器も少なく、ナイフで戦ったそうだ。そう紹介されても信じられないくらい、はにかんだ笑顔が素敵でシャイな人だ。

その後、そのプンさん、スレンダーさん、彼らの友人のBJさんらに引き合わせてもらったのがマオイストのリーダー・通称プラチャンダだ。プラチャンダとは、ネパール語で「獰猛な人」という意味らしい。しかし、第一印象も会見しているときの印象も、やさしそうな紳士であった。プラチャンダの本名はプスパ・カマル・ダハルというらしいが、誰もがプラチャンダと呼んでいた。

毛沢東の言葉に「革命とは暴力だ」という言葉がある。「農村から都市部を包囲する」という考えのもと、暴力を活用し革命を起こすというのが世界に広がる毛沢東派の基本的な考え方のようだ。

プラチャンダが一九九五年にネパール共産党統一センター派内の自派を「毛沢東派」と改称し、総書記に就任したところから「マオイスト」の歴史は始まる。

マオイスト、革命への道程

翌年二月十三日に、ネパール西部の四郡で警察署などを襲撃し、これが今後十一年にわたる人民戦争の始まりになった。先に紹介したプンさんは、この英雄なのだ。

ただ、農村部を支配するだけではネパール全土を支配することはできない。そのため、プラチャンダは、農村のみならず都市部での大衆武装蜂起も進めることが必要だと考えた。

これがいわゆる「プランチャンダ・パト」（プランチャンダの道）というイデオロギーであり、二〇〇一年の第二回党総会で運動方針として採択されたものだ。その後、マオイストの農村部の実効支配は広がり、約八割に及んだという。二〇〇六年には、議会に議席を持つ七つの政党と共に、国王の暴逆に反対する民主化運動「ロクタントラ・アンドラン」（ロクタントラとは「国王なき民主主義」という意味で、アンドランは「運動」という意味）を広め、ついに王制が廃止された。

そして、二〇〇八年の制憲議会選挙でマオイストは第一党になり、プラチャンダは首相に選任された。しかし、マオイストは過半数を取ることができず、その後もネパールでは政党間の離合集散・対立が続き、制憲議会において憲法が制定されず、制憲議会自体も任期が切れて開催されない状態が続いている。

ちょうど、木村さんと私が訪問した三月は、次期総選挙を行うために内閣が解散し最高裁判所判事を首相とした選挙管理内閣をつくろうとしているところだった。

ネパール共産党マルクス・レーニン主義派の元首相ネパールさんも、マオのプラチャンダも「選挙は六月か十一月。できれば六月にやりたい。次は我々が過半数をとる」と、両陣営とも強気だった。

日本の新聞のベタ記事でも書かれていたように、いったんは六月総選挙ということで合意し対外的にも発表された。しかし、その後、現地のスレンダーさんらから話を聞くと、六月総選挙には準備が間に合わず、十一月になるらしい。

ネパールは雨期があるため、七月から十月の間は地域によっては雨で道路がぬかるみ投票に行けないらしい。そのため、六月の次は十一月ということになると言う。

私は一足先に日本に戻り、木村さんは私がネパールを発った後も数日滞在し、引き続き政府・政党の高官との会談を続けたということだった。

滞在中、遅ればせながら素朴な疑問が湧いた。木村さんは右翼、マオイストは左翼。なぜ親交があるのか、という疑問だ。木村さんの答えは明快だった。「既存の右とか左とかの概念は関係なく、自分たちの国を思う気持ちがあるかどうかだよ」と。

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。著書に「図解・リスクのしくみ」「パル、タパス、アルサック」など多数。

月刊レコンキスタ２０１３年５月号